も仙人の風容がある。即ち心まかせに書いてあるのであるが、こゝが又最も書の味のあるところで、隨分度胸のよい書き方だ。然し之も亦山谷にし始めて爲し得べきことで、最初から何も譯の分らぬ人が、氣まかせに書きなぐつたところが、書になる譯のものではない。つまり法に入れて法を出でたところの、天空海濶と云つたやうな心境に達した人のみに於て得らるべきことである。

それから彼の朱子は如何であるかと云ふに、此人は東坡と異り、唐朝の書風を格守して、謹嚴なる眞面目一方の書を書かれたのである。それは朱子として當然のことであつて、彼の道學先生の頭であるから、よしや唐風を學ばぬにせよ、必ず唐風に近い、眞面目な書が出來たに違ひないのである。而して朱子の書は氣力のある、筆勢の整然たる仙人の風容はないが、王師堂々の行軍を見るの趣がある。

十四

米芾の書は意態暢達、之亦唐風より一新生面を開いたものであつて、我國にはこの米芾を無二の師友とし仰いだ人が多いのである。即ち百五十年前頃に、唐様の書風を書いた人は、多くはこの米芾を學んだのある。彼れの書論中に寧ろ字の神を寫して、字の影を寫すこと勿れと喝破してあるのを見ても、米芾は意態を主として唐朝の如き格式ばかりに重きを置いたのと、餘程心持ちが異つて居たことが分るのである。

殊に米芾は山水人物を畫くにも妙を得て居たのであるから、尋常一様の書家の書とも、餘程世間離れをして居たのである。

蔡襄も亦宋の人であつて、當時天下第一とまで稱せられたのであるが、其系統は王羲之に屬する方だ。併しながら既に唐朝を經過した時代であつたので、自然唐朝の筆至も加はつて居たが、兎に角蔡襄は書道史上忘却してはならぬ人である。

此他張即之や李時雍や張天錫などは、此時代に歴々たる大家であつたのだが、併し唐朝の唐朝を眞面目に承繼したまでのことであつた。

斯く宋朝に於ては唐朝の書に反旗を翻す人も出來るやうな有様で、宋朝一般の書風から觀れば、宋朝は格式よりも心意を尚ぶの風が盛んであつたのである。實に之は書ばかりのことではない。世間何事もこの通りで、深々たる妙味があるやうに思はれるのは他でもない。即ち一偉人出でゝ呼べば天下悉く之に從ふと云ふ有様で、少數ではあつたが東坡や山谷や米芾の如き傑出した連中が騷ぎ廻はしたものだから、天下の心も自然之に傾いたらしいのである。

餘計なことではあるが、何とか云ふ畫家が六朝文字だと云つて、無理無法の筆使ひをして、雅致があるとか何とか云つて獨りよがりをすれば、盲千人否盲萬人の世の中は、猫も杓子も六朝々々と云つて眞似をすると云ふ有様だ、宋朝ならで昭和の今日目擊するところではないか。實に恐るべきことである。

さて時勢は一轉して金となり元となつた。而して宋朝ではどうやらかうやら唐朝文物の精華が保たれて居たが、金より元と混亂時代になると共に文物の精華は地を拂つて去り、人間は皆小規模な小刀細工的のものばかりになつて了つたのである。先づ今日から見て指を屈すべき人は、鮮于樞と周伯琦と趙子昂の三人である。

鮮は細楷に妙を得、周も先づ上手ではあつたが、到底唐朝の精に比すべくもあらざる程の、極めて小さい品位になり下つたのは、時勢の然らしむるところであつて、又詮方なき次第である。

趙子昂は元朝第一の書家であつて、今尚命脈を保つて居るのである。而して子昂の志したところは、李北海であつた。前にも述べたるが如く、李北海は終生王羲之を習つて後世の人がよく王羲之の眞意を得て居ると云ふ程の人であ

つた。即ちその李北海を子昂は古今第一の書聖であると信じて、一生懸命に李北海を習つたとのことである。

故に子昂の書は王羲之に似て居るところがあり、李北海の書とは形に於て見別けのつかぬ位にある。併しながら李北海を凌駕することも出來ねば、無論王羲之に比較すべき技量も無い。只書風混亂の時代に如何やら斯うやら唐朝の李北海の眞似方が出來ると云ふ位のものである。

併しながら子昂の天性が然らしめたもので、如何も子昂と云ふ人物が十分高潔な人でなかつたらしいから、書は巧妙と云へば云はるゝに拘はらず、書の精神に俗氣がたつぷりの有樣であるのが、實に鼻につく譯であらう。されば我藤田東湖先生の如きは、子昂は人物が下劣であるからと云ふので、子昂の書を習うに手本を机の下に置かれたとのことである。若しも子昂が高潔な節義の高い人であつたなら、十分精華を發揮したであつたゞらうに惜いことである。又李北海以上の高い所に眼を着けなかつたと云ふことも大なる缺點であると思ふ。

趙子昂の書に對する諸家の批評も澤山あるが、最も穩當の見解と見る可きものは、包愼伯の評であるから、參考のために譯して見やう。曰く、

吳興の書筆は、專ら平順を用ゐ一點一畫、一字一行、排次頂接して成れり。古帖の字體は大小頗る相逕庭するものありて、老翁の愛孫を携へて行くが如く、長短參差として情意眞摯に、痛痒相關せり。吳興の書は即ち市人の隘巷に入るが如し。魚貫して徐行すれども、先を爭ひ後を競ふの色は人々の面に見はる。安んぞ能く上下左右空白に字あらしめんや。其盛んに行はるゝこと數百年なる所以は、徒らに經生筆吏に便なるが故のみ。然れども竟に廢する能はざるものは、其筆平順なりと雖も、來去出入の處皆曲折停蓄あるを以てなり。其後の吳興を學ぶ者は極似すと雖も曲折停蓄存せずして、惟勻淨ならむことを求む。是を以て一時は經生、筆吏の宗尙する所となれりと雖も、踵を旋らさずして煙消え火滅せりと。

更に之を言へば趙子昂の書は、高尙な風致がない。唯優美なと云ふばかりで、丁度活字を見たやうな味のないものであるとのことだ。要するに元朝に屬する時代には、書の氣品が段々と下りなま優しい美しい文字が流行した傾向のあることは、子昂の如き能筆にして尙然るを見て分るのである。

處が明朝に入つてから、書道は尙一層下向きになつた。是には種々なる原因もあるであらうが、就中主なる理由は法帖を主として習つたことゝ、書が實用的に流れたとの二つであると信ずる。乍併明朝の卑俗と雖も、順序として之を顧みない譯には行かぬが、先づ明朝の大家としては、文徵明、解縉、董其昌、祝允明等の諸氏である。

文徵明は趙子昂の書を古今稀なるものと推重して居つたとのことであるが、果せる哉徵明の書は子昂の筆意其のまゝだとは言へ子昂の書よりも氣品に於て一頭地を抽んでゝ居るのは、つまり徵明其の人の性格が然らしめたところであると云はねばならぬ。即ち徵明の爲人を見るに、如何にも高尙な精神と寬厚な度量とを有して居たのである。今其一列を擧げんに、徵明は單に書ばかりでなく、畫も亦堪能であつたが、先生の書畫を僞筆して持つて來て贊辭や落款を求むる者があれば、先生は平氣で贊を書き落款をしてやるのを常として居られたので、或時何故に斯樣なことをなさるのかと問ふ人があつたところ、先生答へて云はるゝには、凡そ書畫を求むる者は富豪であるか、賣る者は貧しい者だ。されば此書畫が賣れない時には飢餓の憂にも至るであらう。若し我一時の名をなさんがために其の需めを吝まば、其人は困窮を受くること必然であるから、我れは快く應じて居るのだと云はれたとのことであるが、此一事を見ても其全部が察せらるゝではないか。

今の書家でも畫家でも時勢の然らしむるところとは云へ、徵明の如き心事潔白にして、眞個に藝術其ものを以て生

命とする者の無いのは、眞に遺憾千萬なことである。即ち今の書を書き畫を書く人の多くは先づ、書を樂しみ畫を樂しむ人でなくて、目的とするところが藝術の眞意と相離れて居る。飯の種ならまだしものこと、畢竟金が最終の目的で書くのだから堪らない。こんな連中に少しばかりでもよいから、徵明の鼻糞でも呑ませてやりたいものである。殊に今日の畫家の陋劣と云つたら、たゞ〳〵長大息をするばかりである。

書道講話 終

書道講話

昭和四年八月廿五日印刷
昭和四年九月一日發行

【定價金壹圓】

書者　玉木愛石
著者　小野鍾山
發行者　東京市本郷區森川町一番地　貞金久良
印刷者　東京市本郷區湯島六丁目十六番地　中村利七

發行所　東京市本郷區森川町一番地
振替口座東京一九四六七番　文成社

不許複製

終